分科会Ｃ「特別支援教育」

テーマ：通級指導（教室）での学びを生かせる通常学級の支援の在り方
～通級指導の現状と課題を考える～（１年次）

１　研究の概要

共生社会の実現を目指し、多様な学びの場が保障されるとともに、学校においてはインクルーシブ教育システム構築に向け、更に特別支援教育の充実が求められている。しかし、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に対しては、いまだ地域や学校ごとに特別支援教育の推進状況や教員の専門性等の実態に差があり、指導・支援の充実に至っていないという課題がある。

当センターでは、前述の課題を受け、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒への指導・支援の充実を図ることが急務であると考える。特に、「見えにくい障害」として周囲からの理解を受けにくい特性のある発達障害の児童生徒の「育ち」を保障できる指導・支援の在り方を模索し、将来の自立と社会参加に向かう力の獲得につなげていきたいと考える。そこで、発達障害通級指導教室における個別支援に焦点を当て、通級指導での学びを通常の学級で生かすことのできる指導・支援の在り方の探究をテーマとする。

２　分科会の流れ（分科会参加人数 15人）

(1) 開会・概要説明
　研究の概要について
　・県立教育センター　指導主事　久住　和彦
　アンケート調査報告
　・県立教育センター　指導主事　長津　綾子
(2) 実践発表
　・聖籠町立山倉小学校　　梅田　昌子　教諭
　・佐渡市立両津中学校　　萩野　　恵　教諭
　・県立長岡明徳高等学校　高井　章男　教諭
(3) パネルディスカッション
　通級指導(教室)の現状と課題
　〈パネリスト〉　実践発表者３名、　〈進行〉　県立教育センター　副参事　藤田　綾子

パネルディスカッションの様子

３　分科会の概要

(1) 研究の概要説明
　ア　研究の方法と計画
　本研究テーマを、「通級指導（教室）での学びを生かせる通常学級の支援の在り方」に設定し、障害のある児童生徒が通級指導（教室）で身に付けた有効な学び方やスキルを在籍学級においても発揮できることを目指す姿とした。
　研究期間は３年間とし、１年次は、通級指導（教室）と在籍学級の現状と課題を洗い出し、見いだした課題の解決に有効だと思われる支援や方策等を検討する。２年次、３年次においては、小学校、中学校、高等学校それぞれの協力校と連携を図りながら実践を積み重ね、成果のあった支援体制や支援方法を集約し、研究成果としてまとめ、報告を行う。

イ　アンケート調査の報告

アンケートの実施対象者は、過去２年間で当センター主催の「通級指導担当者研修」の受講者のうち、自校通級指導教室（発達障害）を担当している教諭とした。小学校21校、中学校６校、高等学校１校から協力を得て、アンケート結果をまとめ、報告した。

【通級指導（教室）に通う児童生徒の実態】

・集団参加が苦手

・きまりやルールが守れない

・学習面でのつまずきがある

【教育課程の編成】

・小学校、高等学校は自立活動をメインにしているケースが多い

・中学校は教科の補充の比重が大きい

【学級担任との連携方法】

・日常的に行われる口頭での情報交換（連絡ノート、指導記録を合わせて活用）

・通級指導担当者が在籍学級の授業参観を行う

・校内委員会、ケース会議の開催

・個別の指導計画の活用

(2) 実践発表

ア　聖籠町立山倉小学校

(ｱ) 実践の概要

児童の特性や抱えている困難さの特徴を、通級指導教室で丁寧に実態を把握し、有効な支援の方法を探った。できるだけ通常学級で取り組む学習活動（内容）や学校行事などに関連付けて、指導計画を立てるようにし、通級指導の自立活動の中で、児童が学びやすい方法であらかじめ取り組ませることで、児童が「できる」と自信をもてるようにした。個から小集団と段階的に練習し、習得した力を在籍学級でも発揮できる具体的な指導方法を在籍学級の担任と共有し、学級担任による「合理的配慮」を行い、成果のあった事例を紹介した。

(ｲ) 成果と課題

通級指導担当と学級担任が、実際にそれぞれの学びの場での児童の様子を参観し合い、情報を共有することで、両者が同じ目線で児童の「できた」を褒めるなど、適切な支援を実践することができた。在籍学級での児童のプラスの変容を受け、保護者の児童に対する接し方にも変化が見られ、児童の困りごとの軽減につながる相乗効果も見られた。このことから通級指導担当・学級担任・保護者の三者が連携することの有効性を示していると考えられる。一方、課題として通常学級の担任は多忙であり、授業参観や情報共有の時間を確保することが難しい現状がある。

イ　佐渡市立両津中学校

(ｱ) 実践の概要

生徒を支援していく上で、生徒と教員との信頼関係が基盤にあることが大前提である。通級指導教室に通ってくる生徒の自己肯定感が総じて低いということから、生徒の自己肯定感を把握する方法として、ＳＯＢＡセット(Social and Basic Self Esteem Test)を用い、生徒が自己をどのように捉えているかを分析した。生徒に寄り添い、自己決定に基づく行動を促

し、アサーション的表現の学習や、トークン表を活用した振り返りを行い、生徒の成長を承認することで、自己成長に向けて目標を少しずつレベルアップさせながら取り組んだ自立活動の実践を紹介した。

(ｲ) 成果と課題

通級指導を開始した時の自己肯定感の得点と、生徒の気持ちを尊重しながら生徒に寄り添った支援後の得点では、生徒の自尊感情に肯定的な変容が見られた。また、通級指導において学習への支援を行うことは、生徒が心理的に安定して授業を受けることにつながり、学校生活に向かう意欲が向上した。中学校は、教科担当制の授業中心のため、担当者間で情報を共有し、連携する時間確保が難しく、通級指導教室で行われている自立活動が、全ての授業においてどのように般化されるかが課題である。

ウ　県立長岡明徳高等学校

(ｱ) 実践の概要

高等学校における通級指導は昨年度（平成30年度）から制度化され、県立長岡明徳高等学校に今年度（令和元年度）から設置された。自校通級のみとし、週１時間（１単位）の選択科目の一つとして、「自己探究」と「職業研究」の２講座を開設、今年度は21人が８講座に分かれて受講している。特別支援教育の専門性を有する教員が１人配置されているが、全職員が関わる自立活動講座をコンセプトにして運営している。社会性やコミュニケーションに関する指導をキャリア教育と関連付け、卒業後の生活を見越した高等学校における自立活動の実践である。

(ｲ) 成果と課題

大きな成果として、受講した生徒が主体的に取り組み、特に人前で話せるようになり、ペアワークに取り組めるようになるなどの変容が見られた。自立活動に取り組むことで生徒は成功体験を積み重ね、自己肯定感が向上したものと考えられる。保護者からの支援要請が大きい割に、生徒本人への動機づけが難しい現状もあり、小集団で週１時間だけの自立活動の効果を高めること、受講する生徒の適切なグルーピングを行うこと等、課題を見いだすこともできた。また、運営面では、担当人員と持ち時数への配慮、自立活動講座に対する職員の意識向上が今後の課題である。

(3) パネルディスカッションでの質疑応答

ア　高等学校で、「自立活動」とは伝えずに、生徒へ授業説明していることについて

高井：生徒の自尊感情に配慮した。特別な場所で、特別な支援・指導を受けたくないという生徒もいる。そういった気持ちを考え、他の教科・科目と同じ授業の一つとして位置付けたため、講座についての説明では「自立活動」という言い方はしていない。

イ　通級指導（教室）における指導内容について

梅田：自立活動は、教科書・指導書があっての通常学級の指導とは違い、指導項目から外れなければ、児童が通常学級で学ぶ際に困らない力を付けさせる内容を何でも取り入れられる。いいチャンスと捉えることができる。

萩野：中学校では、目の前に高校進学という目標があるため、教科・科目の学習を取り入れることの必要性も感じている。生徒が成長したときに必要となる力は何かを考え、丁

寧に実態把握を行い、ソーシャルスキルトレーニングと学習への支援のバランスをみながら指導内容を工夫している。

高井：自立活動の27項目に意味付けしながら、個々の生徒に合わせて目標を設定した指導案を作成している。

ウ　自立活動の具体的な内容について

阿久津：自立活動は、児童生徒に将来必要な力を付けていかなくてはならない。ひとつの単元に、対象とするそれぞれの児童生徒に必要な力を付けられる指導内容をちりばめながら授業を構成していくことが有効である。

高井：高校は社会への出口が間近である。適切なライフスキルを身に付けることで学校生活を円滑に送ることができる。それが生徒のモチベーションにつながると考えて取り組んでいる。

エ　通級指導（教室）で育んだ力を在籍学級で発揮できる連携の在り方について

梅田：理解し合うことが大切。通級指導教室について理解啓発を図る校内研修を実施した。また、生涯関わる保護者の理解を深めていくことも大切である。

藤田：通級指導教室に通う児童生徒に対して、在籍学級の担任の当事者意識が希薄になりがちという現状もあるかと思う。

梅田：通常学級の授業をできる限り参観している。通常学級の児童の困りごとも見ながら、その場で支援に入り、児童がいきいきと授業で活躍できるための支援を紹介するようにしている。

阿久津：保護者面談を通級担当者と学級担任の三者で行うことがとても有効である。また、通級指導教室で行っている支援・指導は、通常学級で困っている児童生徒にとっても有効な指導方法である場合が多い。児童生徒の学びが広がる可能性があり、先生方にとって利益となるものを共有していくべきである。

４　参加者からの感想

・校種を超えた通級指導の現状についてよく分かった。

・先生方の授業実践を基にした有意義な協議ができ、有り難かった。温度差は、担任だけでなく通級担当者同士にもあるかもしれないと感じる。今後も謙虚に実践を重ねていきたい。

・高校の発表に関心があった。もう少しゆっくり、内容を絞って聞きたかった。

５　振り返りと提言

小学校、中学校、高等学校の３校種のアンケート結果、実践発表や通級による指導の現状と課題を中心に据えたテーマで行うパネルディスカッションをとおして、校内の連携強化、業務の負担軽減、「自立活動」に対する専門性の向上、教員の特別支援教育についての理解推進といった課題を見いだすことができた。

次年度、一年次の研究で焦点化した課題の解決に向けた支援や方策等について検討し、通級指導教室における環境設定、活動構成、人的支援など、児童生徒に対する個別支援が、在籍学級においても有効な支援・指導であることを検証すべく調査・研究を進めていく。